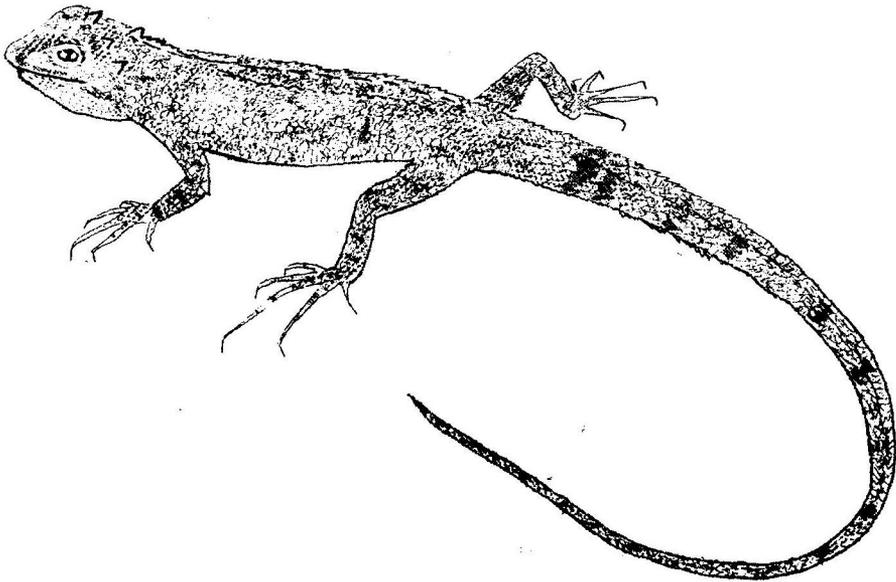


ORIENTS

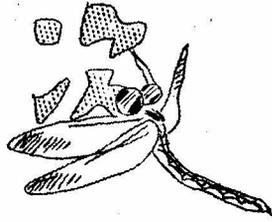
MARCH. 15. 1963

第 4 号



Japavula polygonata polygonata
(Hallowell)

鹿児島県立大島高等学校生物部



	頁
巻頭言 顧問 大野 隼夫	3
崎原採集記 2年 伊東ムツ代	5
熱帯医学研究所訪問記 2年 川崎三重子 泉雅子	11
ちょっとした実験 3年 政 定好	14
入部して 1年 森田 盛政	15
ハブ生態研究所を訪問して 2年 荒垣美保子 川元栄子	16
おもしろい事 18	18
ゴケについて 3年 栗園 重弘	19
イシカワシジミについて 24	24
血液型判定 2年 森田房子 福原孝代	26
血液型と学力 1年 平瀬 吉磨	28
ミドリムシ 2年 浜崎 常隆	32
奄美の花 アマミセイシカとその近縁種 顧問 大野 隼夫	34
個人点評 31 ~	38
部 記 昭和37年度	38
生物部員名鑑 昭和37年度	39
編集後記	40

巻頭言

顧問 大野隼夫

「石の上にも3年」。オリエンズも誕生以来満3年を経過した。オム号からは名実共に飛躍的な発展をと期待したが……………。

我が学園に突如としてガリ颯旋風が襲来し、4月以来補習につぐ補習、テスト又テストで夏休み、冬休みも返上すると云う仕未で、クラブ活動を盛り上げるには余りにも多忙であった。これも学力向上のためとあれば敢て甘んずるべきであろう。

それでも伝統の灯をともし続けようとする部長はじめ部員の心からなる熱意によりオム号が発刊されることになったことは喜ばしい限りである。

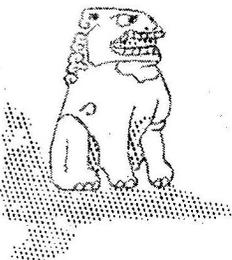
「クラブ活動とは何か」時々こういう疑問に悩める部員もあるだろう。その時はじっと目をとじて置きにし日々を思いだしたらよい。クラブ室での楽しい集い。文化祭を中心とする展示や解剖。血液型判定。なれない手つきの顕微鏡観察実習など。

或は又崎原——小湊採集コースの強行軍。……………美しく山路を彩る路傍の花の数々（特にテッポウユリは見事であった）。天然の笛を饒い吹く小鳥の群。濁きに濁いたのどをうるおす岩清水……………。

これらはおそらく学歴時代をきれいに映しだした心のフィルムの一駒一駒として脳裡に刻み込まれているにちがいない。そこにクラブとしての意義を見いだしたらよい。純粹な研究機構等と混同して片若しく考える必要は更はない。

去る者残る者万感交々であろうが、来学年は一段とクラブの充実を図るべく特に、2年、1年の奮起を希むことである。

昭和38年1月7日



(4)

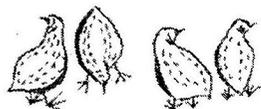
〈表紙説明〉　きのぼりとかが

Japarula polygonata polygonata
(Hallowell)

沖縄諸島、八重山、奄美大島等に分布する。体長250mmを超えるものがあり、尾は長く体長の約2/3或はそれ以上に達し、尾端は尖る。頭部は大きく、吻端は尖らず、頸部は細い。四肢はよく発達して指は長く、よく樹上にのびる。体は後端の尖った竜骨状の隆起のある鱗が覆瓦状にならび、背部正中線に添って鋸齒状の隆起がある。色彩は周囲の状態によって変化する。暗褐色乃至暗緑色、黒褐色の不規則な帯状の斑紋があり、背部両側を黒褐色のへりをもった黄色の幅広い線が縦に走る。尾部と四肢には黒褐色帯状斑紋がある。腹面は灰色、咽喉部は淡赤色を帯びる。

浸漬標本では緑色、黄色が消え易く、その部分は暗褐色乃至灰色を呈す。

崎原採集記



二年 伊東ムツ代

4月のはじめに、新入部生の歓迎を兼ねて私達生物部員は崎原への採集を試みました。

その日は晴天で採集にはたいへん都合のよい日でしたが、距離がわりと遠かったので、思ったよりは採集できない結果となってしまいました。しかし空はどこまでも青く、崎原から、はるか海の彼方に善界島がうかんでいるように見え、とてもいい遠足ではありました。また崎原——小湊の荒れた畑、草叢帯、岩の上などにはテッポウユリがところせましとさきみだれ、その光景は非常に印象的なものでした。帰りは祭しかった一日を友達や先生達と話しながら小湊から名瀬まではバスで帰りました。

ではまずはじめに、目的、参加者名、準備用具について書いてみます。

目的 名瀬——崎原——小湊の植物、昆虫の採集

参加者 顧問 大野先生 南先生

他、生物部員 18名 (3年2名、2年14名、1年2名)

準備用具 胴丸、せんていばさみ、根ほり、捕虫網、三角紙、殺虫管
では崎原採集の感想、植物名を述べてみましょう。

1日がかりで4月29日午前9時本校々庭を出発。その日は夏の日におとらないくらいの採集にはもってこいの日よりでした。しかしいざ山道にさしかかると慣れないせいか、みんなの足どりは時間がたつにつれてはかどらなくなっていくようでした。それにもまして人家のある所につくまでの水の欲しさ、のどがかわききったようで、人間にとって水がどんなに必要なものであるか、再三思い知らされました。その間の採集物は各個人が採集したのを顧問の先生に、名前や、また時には名前のできた由来、その植物独特の性質などを尋ねてそれを明記するといった方法であった。例えば、ヌズビトハギというのは、その種子を包んでいる

(6)

萼が盗人の足に似ているとか、ササバサンキライは葉がササの葉に似ているからとか、タマシダは地中に塊莖をもっているとか、またアマシバはかんでみると甘い味がするとかいう事などでした。それを聞いて、ほんとうかなと思った私達はアマシバの小枝を折って、かんでみました。するとなるほど甘い味が舌先に感じられました。でも少し気持ち悪くなってすぐはきだしてしまいました。それから気をつけて採集すると、シラタマカズラの実は白くて丸く、リュウキュウシロズミレの花は、私達が普通道端でみるすみれの花とよく似ているけれど花の色は白くて、なるほど名前のおりだなと思いました。

先生に植物名などを尋ねながら感じたことは、生物部員である私達が、あまりにも植物名、昆虫名、こういう生物に関する知識をもっているものが少なかったということでした。その日からいろいろな生物に関する事柄をおおいに図鑑や参考書で調べようと思っていましたが、つい何ヶ月もの間のんびり過ごしてきた事を後悔しています。

名瀬——崎原間は道路が非常に広くて、歩きやすくもありましたが、一方崎原——小湊間は山道であったので狭くて歩くのに不便を感じました。しかし山のいたるところにテッポウユリがいっぱいさいていて本当に私達を夢にごそいこむような大自然の美しさにほれほれました。全く自然の中に咲きみだれているユリの花をみていると、やはり自然の中に咲いている方がびったりした感じがして、ふと心の中に、どこかで聞いたことのある「野の花は、やはり野におけレンゲソウ」という句が思いうかべられました。このように、雑草の中から顔をのぞかせている一輪の花に愛着を感じることをできるのは、生物部員でないと、どうても味わえない気持ちだとも思われました。

ただその日、生物部の一員として残念に思ったことは、全員が参加せず、少数の人々であり、また新入生歓迎もかねている採集会であったのに、一軍が少なくそれに女生徒がわずか8名だけだったので心ぼそく思われました。これから私達の生物部をおおいに繁栄させるために、もっともっとみんなが生物部員としての自覚をもって前進して行くよう心がけてほしいということでした。

<植物名>

被子植物

おとよみぎ

Artemisia japonica Thunb.

(きく科)

あきのきりんそう	<i>Solidago Virga-aurea</i> L.	(きく科)
わたな	<i>Conyza japonica</i> Less.	(きく科)
ほうごぐさ	<i>Gnaphalium multiceps</i> Wall.	(きく科)
ぶくりょうさい	<i>Dichrocephala bicolor</i> Schlttdl	(きく科)
あまみじやじん	<i>Adenophora triphylla</i> DC.	
	Var. <i>insularis</i> Kitam.	(ききょう科)
しろたまかずら	<i>Psychotria serpens</i> L.	(あかね科)
けにおいぐさ	<i>Hedyotis tenelliplora</i> Bl.	(あかね科)
あかみずぎ	<i>Wendlandia formosana</i> Cowan	(あかね科)
じゆずねのき	<i>Damnacanthus indicus</i> Gaertn. fil.	
	Var. <i>major</i> Makino	(あかね科)
りんどう	<i>Gentiana scabra</i> Bunge	
	var. <i>Euergeri</i> Maxim.	(りんどう科)
なんばんぎせる	<i>Aeginetia indica</i> L.	(はまうつぼ科)
あましば	<i>Symplocos microcalyx</i> Hay.	(はいのき科)
ときわがき	<i>Diospyros Morrisiana</i> Hance	(かきのき科)
なぜざくら	<i>Stimponia chamaedryoides</i> Wright.	
		(さくらそう科)
こなすび	<i>Lysimachia japonica</i> Thunb.	(さくらそう科)
ばたんぼうふ	<i>Peucedanum japonicum</i> Thunb.	
		(からかさばな科)
せり	<i>Oenanthe stolonifera</i> DC.	(からかさばな科)
ふかのき	<i>Scheffera octophylla</i> Harms	(うこぎ科)
のぼたん	<i>Melastoma candidum</i> D. Don	
	var. <i>Nobotan</i> Makino	(のぼたん科)
あでく	<i>Syzygium buxifolium</i> Hook. et Arn	
		(てんにんか科)
ふともも	<i>Eugenia Jambos</i> L.	(てんにんか科)
たちつばすみれ	<i>Viola bryoceras</i> A. Gray.	(すみれ科)
りゆうきゆうしろすみれ	<i>Viola oblongo-sagittata</i> Nakai	(すみれ科)
ひさかき	<i>Eurya japonica</i> Thunb.	(つばき科)

(8)

- なしかづら *Actinidia rufa* Planchon (さるなし科)
ふよう *Hibiscus mutabilis* L. (あおい科)
ごんずい *Euscaphis japonica* Pax. (みつばうつぎ科)
りゅうきゅうつるうめもどき
Celastrus Kusanoi Var. *glaber* Hatusima
(にしきぎ科)
かんこのき *Glochidion obovatum* Sieb. et Zucc.
(とうだいぐさ科)
ひめはぎ *Polygala japonica* Houtt. (ひめはぎ科)
はまくさぎ *Premna microphylla* Turcz. (くまつづら科)
おおむらさきしきぶ *Callicarpa japonica* Thunb. (くまつづら科)
しろばなせんだん *Melia Azedarach* L.
var. *japonica* Makino (せんだん科)
むらさきかたばみ *Oxalis martiana* Zucc. (かたばみ科)
ぬすびとはぎ *Desmodium racemosum* DC. (まめ科)
はまえんどう *Lathyrus maritimus* Bigel. (まめ科)
きんみずひき *Agrimonia Eupatoria* L. (いばら科)
しゃりんばい *Rhaphiolepis umbellata* Makino
var. *Mertensii* Makino (いばら科)
ひいらぎずいな *Itea chinensis* Hook et Arn. (ゆきのした科)
はままんねんぐさ *Sedum formosanum* N.E.Br. Gard.
(べんけいそう科)
たぶのき *Machilus Thunbergii* Sieb. et Zucc.
(くすのき科)
あおもじ *Litsea citriodora* Hatusima (くすのき科)
きつねのぼたん *Ranunculus Vernyii* Franch. et Sav.
var. *japonicus* Nakai (うまのあしがた科)
いたどり *Polygonum Reynoutria* Makino (たで科)
つるそば *Polygonum chinense* L.
var. *umbellatum* Makino (たで科)
からむし *Boehmeria nivea* Gaud. (いらくさ科)
つるまお *Gonostegia hirta* Mig. (いらくさ科)

あらかし	<i>Quercus glauca</i> Thunb.	(ぶな科)
ぎいま	<i>Vaccinium Wrightii</i> A. Gray	(しゃくばげ科)
こばんもち	<i>Elaeocarpus japonicus</i> Sieb. et Zucc.	(ほるとのぎ科)

りゅうきゅうてりはのいばら

Rosa Wichuriana Crep. var. *glandulifera* Honda.
(ばら科)

りゅうきゅういちご *Rubus Grayanus* Maxim (ばら科)

せんになそう *Clematis paniculata* Thunb. (きつねのぼたん科)

ときわかめめざる *Tylophora japonica* Mig. (とうわた科)

とうばな *Clinopodium confine* O. Kuntze (しんけい科)

げっとう *Alpinia speciosa* K. Schumann (しょうが科)

にわほこり *Eragrostis Niwahokori* Honda (ほもの科)

すすき *Miscanthus sinensis* Anderss. (ほもの科)

ぞくしんらん *Aletris spicata* Franch. (ゆり科)

ききょうらん *Dianella ensifolia* Red. (ゆり科)

ほうちやくそう *Disporum sessile* Don (ゆり科)

さきばさんきらい *Smilax nervo-marginata* Hayata (ゆり科)

はりこうがいぜきしょう

Juncus wallichianus Laharpe (しい科)

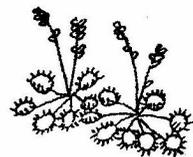
羊歯植物

ひりゅうしだ *Belchum orientale* Presl. (うらばし科)

ほしだ *Cyclosorus acuminatus* Nakai (うらばし科)

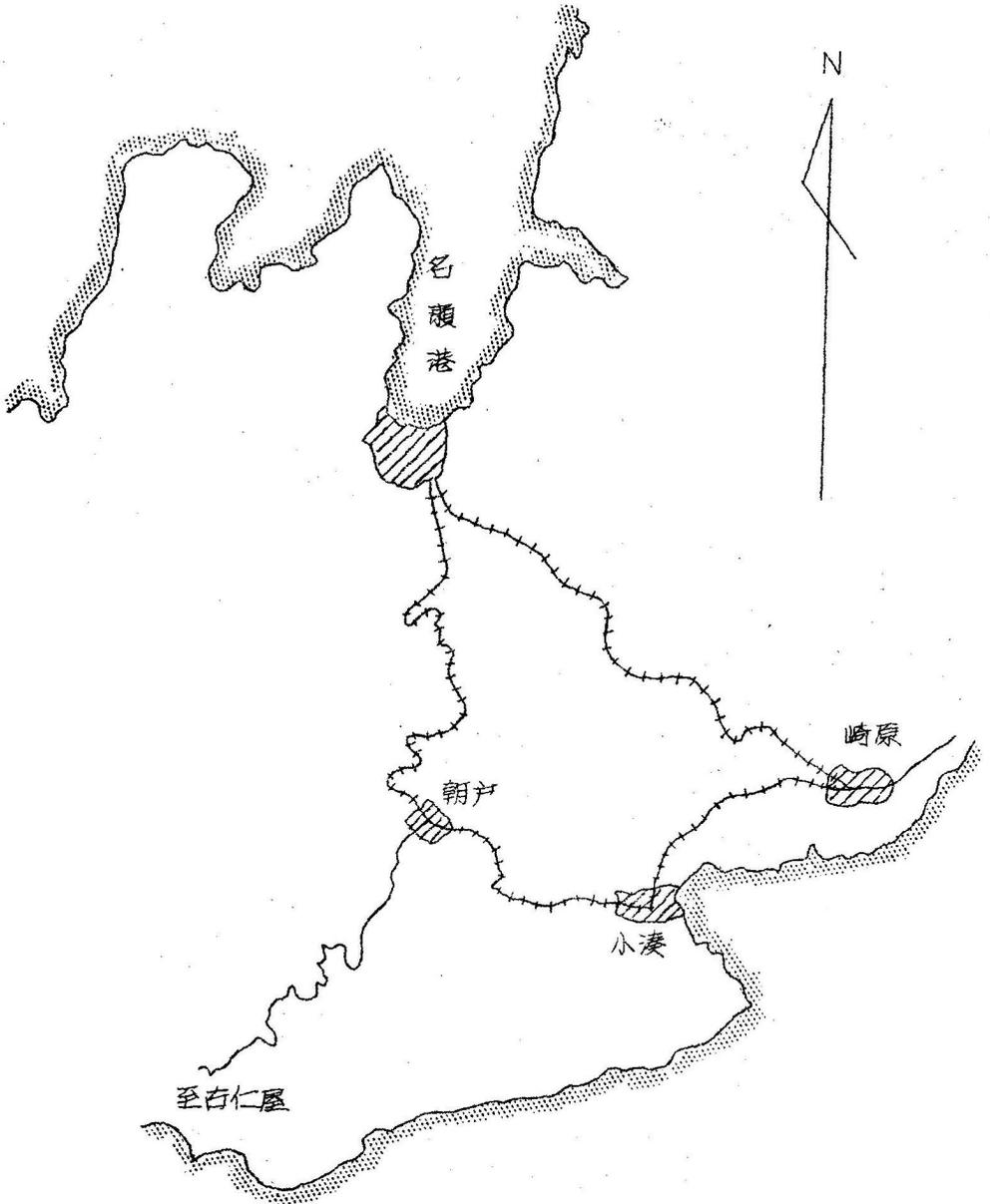
たましだ *Nephrolepis cordifolia* Presl. (のきしのぶ科)

くらまごけ *Selaginella japonica* Mig. (いわひば科)



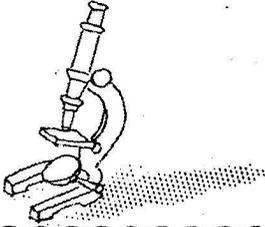


+++++ 採集コース



10万分の1

熱帯医学研究所 訪問記



二年 川崎三重子
泉 雅子

1960年10月1日付 東大、鹿大による熱帯医学研究所が創立され、このほどすばらしい建物が完成した。そこで私達二人は熱研を訪問し、奄美の風土病であるフィラリアについていろいろとたずねました。

調査方法

血中フィラリア仔虫の検索は午後10時以降午前1～2時の間に耳たぶより採血した3割濃厚塗沫標本を乾燥後溶血させてギムザ染色をなし、その他にバングロフト種とアレー種の鑑別を目的としてヘマトキシリン染色、メチルグリーン・パイロニン染色をなした。

ミクロフィラリア（フィラリア糸状虫の仔虫）について

- イ. 午後10時から夜半にかけて末梢血管に多数検出されるカプセルの中に入った長さ3～4ミクロンの、血液内に寄生するフィラリア症を起す糸状虫の卵である。
- ロ. この仔虫は人の体内では親虫にならない。その仔虫が蚊を媒介して蚊の体内で感染虫（フィラリア型仔虫）になる。それを蚊が再び人を刺した時にたまたま浸入する。その感染虫が人の体内で成虫になりいろいろなフィラリア症状を起す。
- ハ. 前にのべた何故夜10時から夜半にならなければ末梢血管フィラリア仔虫が検出されないかということと何故蚊を媒介しなければ感染虫に変化して人の体内で成虫にならないかは今のところ明らかではない。

フィラリア症状

1. 糸状虫性熱発作 さむけがしてふるえて39～40度の熱が急に出る。

(12)

2. 乳糜(血)尿 米のとぎ汁みたいに白く濁ったものに血液がまざった尿。
3. 陰囊^の水腫 こう丸に水がたまって大きくなる。
4. 象皮病 足が象の足の皮のようになつくなる。その理由はリンパにフィラリア糸状虫がつまって血液の循環を悪くするからである。
5. 淋巴線腫 各器官のリンパがフィラリア仔虫のため閉鎖されてはれる。

次にこのようなフィラリアに感染している人々を郡内、名瀬市内、県別と表に表わしてみました。

感染状況 (奄美大島群島)

調査地	検査人員	仔虫(+)	仔虫検 率 (%)	症状具有者		症状具 有率 (%)	感染者 (人)	感染率 (%)
				仔虫(+)	仔虫(-)			
大島本島								
安利町	5170	784	15.2	55	138	3.8	922	17.8
竜郷村	3069	331	10.8	51	247	9.7	578	18.8
名瀬市	8687	720	8.3	46	347	4.5	1067	12.3
大和村	732	100	13.7	24	78	13.8	178	24.3
計	17,658	1935	11.0	176	810	5.6	2745	18.6
喜界島								
喜界町	1167	192	16.5	40	138	23.7	330	28.2
計	1167	192	16.5	40	138	23.7	330	28.2
徳之島								
徳之島町	3320	504	15.2	72	155	6.8	659	19.9
伊仙町	2915	342	11.7	54	331	13.2	673	23.1
天城町	3107	250	8.1	26	220	7.9	470	15.1
計	9342	1096	11.7	152	706	9.2	1802	18.2
与論島								
与論村	4697	758	16.1	165	575	15.8	1333	28.4
計	4697	758	16.1	165	575	15.8	1333	28.4
合計	32864	3981	12.1	533	2229	8.4	6210	18.6

感染状況 (各 瀬 市)

調 査 地	検査人員	仔 虫 保有者	仔 虫 検出率	症状保有者		症 状 保有率	感染着	感染率
				仔虫(+)	仔虫(-)			
市 街 地	7011	666	9.5	39	274	4.5	940	13.4
佐 大 熊	461	3	0.7	0	14	3.0	17	3.7
浦 上	338	2	0.6	0	23	6.8	25	8.0
有 屋	128	5	3.9	0	6	4.7	11	8.6
仲 勝	72	2	2.8	0	2	2.8	4	5.6
大 熊	677	42	6.2	7	28	5.2	70	10.3
計	8687	720	8.3	46	347	4.5	1,067	12.3

参考までに50年前の大島フィチリア仔虫検出率についての表を書いてみると
(吉永氏による1913年)

調 査 地	検 査 人 員	仔 虫 保 有 者	仔 虫 検 出 率
奄美大島本島	492人	121人	24.8%
大島郡城村	219	58	26.5
〃 西仲間	273	63	23.1
加計呂麻島			
大島郡諸鈍	238	78	32.8
喜界島	225	69	30.7
徳之島	118	47	39.8
沖永良部島	939	287	30.6
計	2012	602	29.9

県別の感染状況

県 別	検 査 人 員	仔 虫 保 有 者	仔 虫 検 出 率
東 京 都	269人	2人	0.7%
愛 媛 県	211,126	103	0.05
長 崎 県	196,344	1,901	1.04
鹿 児 島 県			

上記の県だけが感染したというわけではありません。

まだありましたが調査した分だけ参考に上げておきました。

僕は、この実験において、ハッカネズミの耳が $\frac{1}{2}$ になったのは偶然ではない（つまり青カビを飲ませなくても耳が $\frac{1}{2}$ になるとは思えない）と考え、この後も実験を続けてみようと思っている。又カビ類だけでなく微生物、バクテリア類その他を混ぜて、飲ますか、注射して実験するのもよいと思う。又、又線をかけるとか、シリケンイモリの体表液などを用いて実験してもおもしろい結果が出るだろう。

— 入 部 し て —

一年 森田盛政

入学式の日だった。

門のそばの古い校舎の前の垣に各クラブ紹介のポスターが張りめぐらされていた。

それは言うまでもなく我々新生の目を集中させ、そこはたちまち新生の話し声でざわめきだした。僕も友達と「どの部へ入ろうか」と友達と雑談しながら一応そのポスターを見てまわった。その時はどのクラブにも入らないつもりであまり関心はなかったが、一応役に参考になるだろう、といった具合だった。

僕が生物部へ入部した動機は何かというと、それは新学期が始まった最初の日先生が「どのクラブに入るかを調査し、その席上先生から述べられた各クラブのくわしい説明や主な仕事を話されたことである。その時の先生の言葉を借りていって、「生物部は部活動のさかんな部で、又まじめな人のあつまりでジミなチームカラーだ」と言われた。そういう先生の発言もあったが、又僕自身動物、植物あらゆる生物と接し語り合っているのが大好きだったからです。月日のたつのは早いもので *about* 一年も経とうとしている。今までの部活動を反省して見ると、けっして満足はいけるものではなかった。そういうよりは全然クラブ活動をしなかったと言った方がいいんじゃないか、本当に情けない僕である。そんなに感じているものの2学期の中頃から野球部の方へ活動の重点を置いたのど生物部の部活動が前より出来なくなるのは当然である。これからは、もっともっと学業にクラブ活動にとこれからの高校生活を有意義に過ごしたいと思うのである。

ハブ生態研究所を訪問して



二年 荒垣美保子
川元栄子

注：奄美大島には1960年10月1日、東大、鹿大による熱帯医学研究所が創立され、その一環としてハブ生態研究所が併設されている。そちらを訪ねていろいろ伺ってみた。

目的はハブの被害をなくすることであり、従来ではハブのために毎年300人ぐらいの人が害をうけ死亡をしたり付けなくなったりしていた。最近の被害は次の表のようである。

ハブ咬傷患者数調

年 度	29	30	31	32	33	34	35
数	307	328	294	322	284	270	247
(<small>死</small>)	(6)	(4)	(12)	(4)	(6)	(4)	(4)

37年患者発生状況

月 別	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
数	1	2	8	15	13	44	36	28	25	29	11	
(<small>死</small>)						(1)						

註 ()内の数字は死亡者を示す。

表でわかるようにその被害は年々減ってきてはいるが全体の撲滅に達するにはほど遠い。その撲滅の方法は三分野に分かれる。

- (1) ハブに関する生物学的研究
- (2) ハブ撲滅対策の実施
- (3) 咬症治療の撲滅について

ところでハブに咬まれた場合の応急処置として現在使用されているものはED

TAである。これはEDTAが二価金属を遊離することは知られていた。それを同じ二価金属をその中に含むハブ毒（ハブプロテナーゼといひ蛋白質を分解する酵素である）に使用してみた。このEDTAをカルシウム塩にして体内に注入すると壊死や腫れや疼痛を防ぐことができるが、これは応急処置薬であり、ハブ毒の致死因子の作用を防ぐことはできない。それで咬まれた場合はできるだけ早くこれを用い、すぐ血清を注射し致死因子のはたらきをくいとめる必要がある。

ハブの生物的特性を述べてみる。

体長 ハブの全長は東アジア産のハブ属中で最長を示しその他の種類よりはるかに長く2mである。

体色 金ハブ、銀ハブ、黒ハブ、赤ハブ、これ等は体色の変異であって性又は成幼による相違ではない。斑紋の変化は顕著であって、トカラハブ及びヒメハブに比較してきわめて変化に富んでいる。

尾 尾はまきつく性質があるが *Trimersurus gramineus* に比べてけんちよでない。

毒線 毒線は皮膚におおわれているので外部からは分らないが毒牙の根元即ち頭部両側で眼の少し下にある。ハブの毒線は特によく発達しているので頭の後部口角部上方が異常にふくらみそのため毒蛇の典型的な三角頭となっている。

毒液 黄白色をおびたやや不透明な粘液。1回の出毒量はハブの大小により異なるが正常な状態の場合は0.5g～1.0gでまれには1.5gを排出するものもある。

次にハブの行動について述べてみると、昼はん性がある。夜行性で *T. abobris* と同じグループである。凶暴な性質といちじるしい攻撃性をもち、ヒメハブとは著しく異なる。

食物は脊椎動物の各綱にわたっており19科25種に達し、ハブ属中で最も多種類の食餌動物が知られた。ハブはドブネズミ属の最も有力な天敵である。食餌動物のうち最大の動物はアマミノクロウサギである。

活動期は春から秋に及ぶ比較的長期間であるが、周年を通じての野外調査によるデータがない。夏期の夜間における顕著な活動をしているのは20時前後である。

自臭覚は鋭敏で、ハブがきらくもの、好んでよってくるものがあるかどうかは目下研究中。当地の人々がよくハブよけとしてゴムを燃やしているのをみかける。

(18)

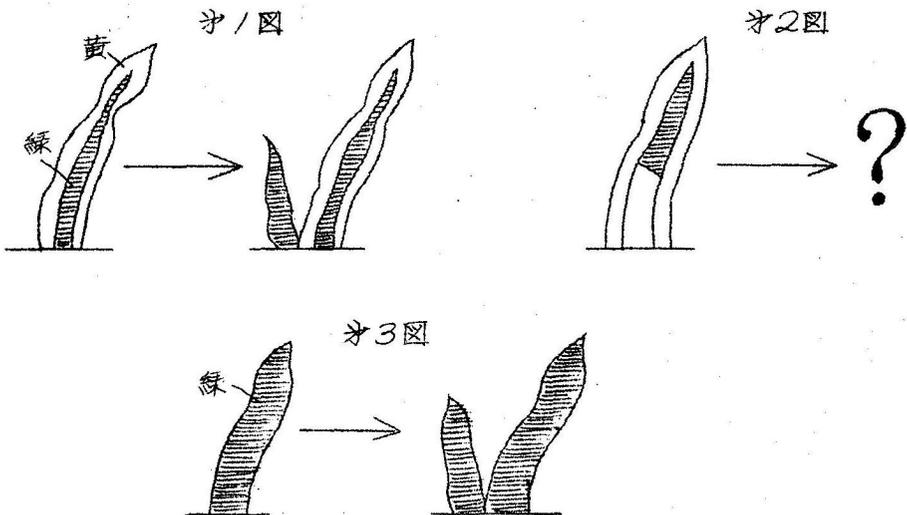
これはゴムや硫黄はそのまきでは全然反応はないがこれらを燃やすとすべての動物にとって有害な亜硫酸ガスが発生するのでハブも本能的にきらう。そのためにこのような方法がおこなわれている。又、カーバイトやそれを燃やして発生するアセチレンガスもきらうが決定的効力はない。カーバイトの燃えかす(水酸化カルシウム)も一瞬位の避効果はあるようである。

このほどハブ生態研究所に立派な野生ハブ研究ドームがつくられた。これは、ハブの自然の様子を観察して少しでもハブの害をなくそうとする目的でつくられた。又、ハブの野生の様子を見ようとここを訪れる人は絶えない。

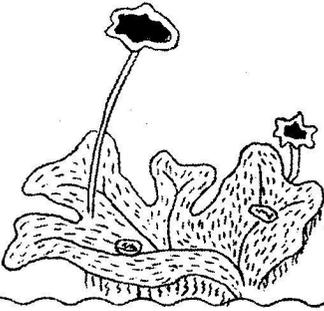
最後にこの資料を提供して下さいったハブ研究所の小野氏に深く感謝します。

おもしろい事

奄美大島にフクリンチトセランという植物がある(もちろん本土にもある)。これもいろいろな種類があるがその一つに外側が黄色のすじのあるものがある。それを★1図のように差木すると黄色のすじがとれて、緑色のものだけがはえ出てくる。★2図のようにしたらどうなるだろうか。しかし★3図のようにしたら同じである。又、なぜ★1図のようになるのだろうか。



ゴケについて



三年 栗園重弘

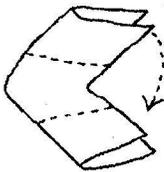
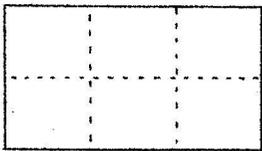
僕がゴケ類に興味をもち始めたのは、高校一年の春休み、部員8名によって8泊9日の大島一周徒歩旅行の時であった。本島を一周しながら、道々いろいろな種類のゴケを見つけた。それまでゴケは普通の庭の湿った所などに見られるものばかりだと思っていたので、いろいろなゴケをみてこれはおもしろいと思い、ゴケについての専門書はないかと後で探したが、あいにく図書館にも生物教室にもなかった。それで教室にあった「理科実験図解大辞典」(全国教育図書株式会社)から、採集方法と整理について知ることができた。

それではゴケ類の採集と整理について述べてみよう。

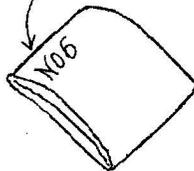
用具 ナイフ、革切り包丁、ピンセット、野帳、ルーペ、上ぶた式桐乱
採集方法

1. 新聞紙で包紙をつくり、革切り包丁で、たて8cm 横5cmにゴケをとり、特にせんがいを落さないよう注意しながら入れる。やや大きめのゴケは一本ずつとってよい。

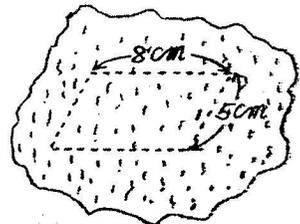
○採集時使用の包紙の折りかた



すみかマジックで
番号を書いておく



○採集のしかた

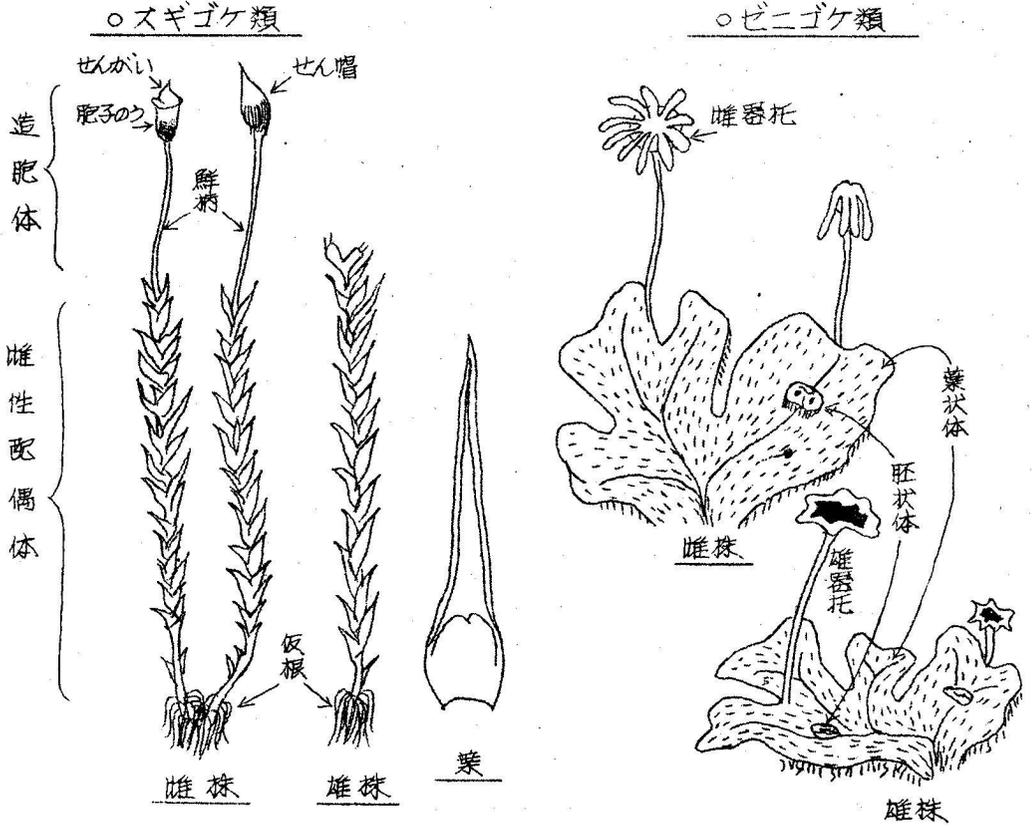


革切り包丁で、ていねい
にはがす。土は少しついてもよい。

新聞紙で前もって包紙をつくり、ポケット
やカバンに入れておく

(20)

2. 雌株と雄株をとる。苔類は雄器，雌器，胚状体のあるもの，蘚類はせん帽，せんがいのついている完全なものを採集する。

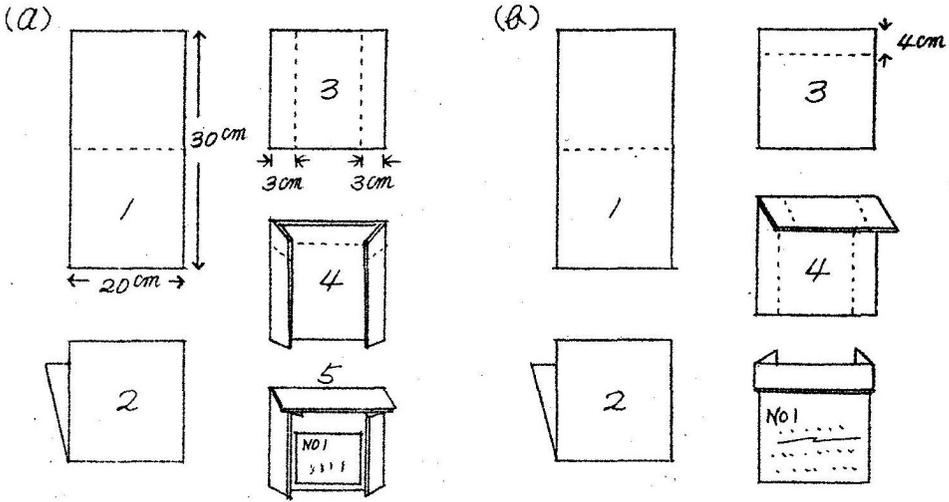


3. 野帳には採集地，生育環境（岩上，地上，水中，樹上など），採集年月日，採集名を記入する。また包紙の番号に合わせて，採集した順に野帳にも番号をつけながらやるとあとで整理しやすい。

標本作成

1. ルーペを固定し，のぞきながらピンセットで，ゴミや土をとりのぞく。他に小さな植物がまじって生えていることがあるので，これもきれいにのぞく。
2. 紙にひろげかけぼしをする。
3. 形の大きい葉状のゴケは，新聞紙にはさみ，かるく板でおさえておく（おもしはのせない）。
4. 包紙に入れてラベルをはる。

○整理用包紙の折りかた



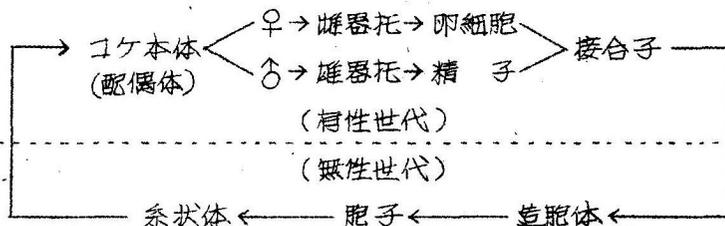
整理 整理だんすに分類して入れておく。

復元 研究するときの復元方法は乾燥している標本を、シャーレの水につけておくとよい。水分を吸ってもとの形にもどる。これをひきだして観察する。

次にコケについて一般的なことを少し述べてみよう。

鮮苔類 (Bryophyta)

1. 根、茎、葉の分化がやや不明りょう。仮根をもつが、これは外見は根のようにしていても養分吸収のはたらきはしない。
2. 無性生殖、或いは世代の交代を行なう。
3. 世代の交代



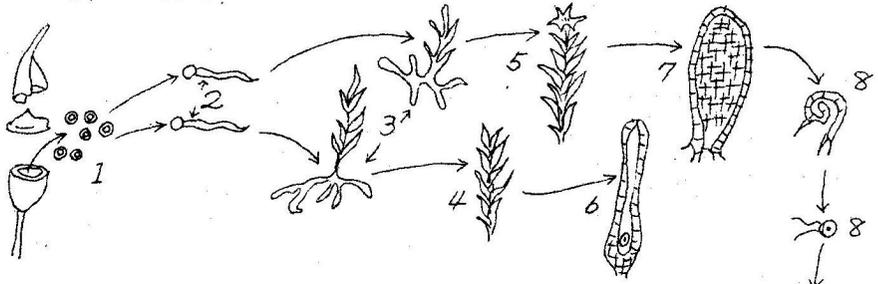
4. 無性世代の植物 (造胞体) は有性世代の植物 (配偶体) に寄生し、栄養をこれに仰いでいる。

5. 蔵精器の外壁は一層の細胞からなり、内部には精子母細胞があって、それぞれ精子となり熟す頃水分が到来すると破れてとび出し、精子は水中を泳いで蔵卵器からの粘液の走化性により、蔵卵器に到着、ここで受精が行なわれる。

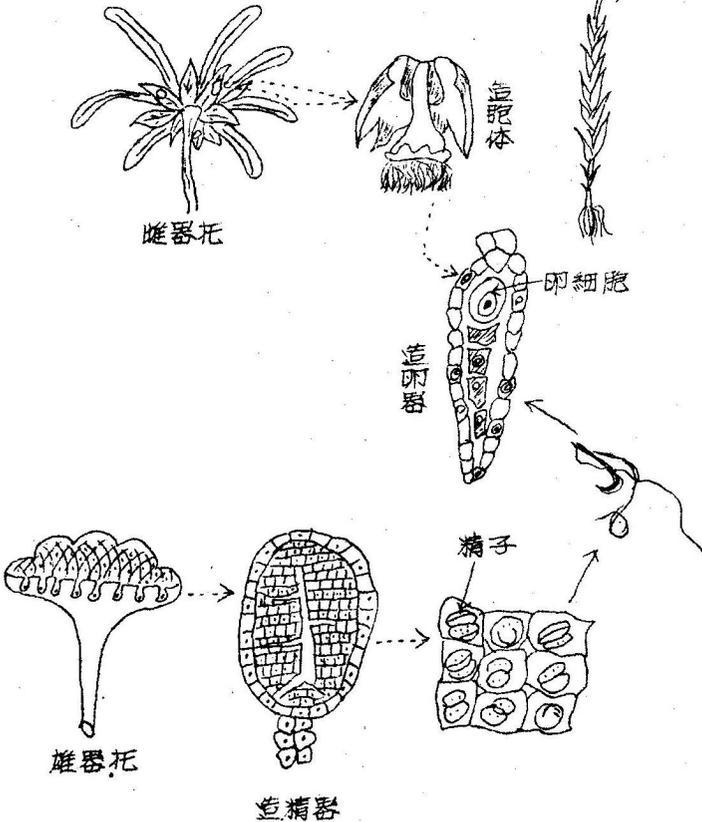
(22)

6. 羊歯植物とのちがいは、鮮苔類では配偶体が大きく、造胞体は配偶体に寄生している。逆に羊歯植物では、造胞体が発達し、配偶体は独立している。

○スギゴケ類の生活史



○ゼニゴケ類の性殖器



1. 胞子
2. 糸状体
3. 糸状体から芽がでる
4. 雌性配偶体
5. 雄性配偶体
6. 蔵卵器
7. 蔵精器
8. 精子
9. 卵球
10. 若い胞子体

次にゴケを見分けるときのめやすとでもいうべきことを述べてみよう。

- a. 普通10倍から20倍のルーペを使う。僕は、10倍と20倍のレンズのついている解剖顕微鏡を使うことにした。これだと観察するのに都合がよい。
- b. ピンセット様のもので葉をはずし、葉の形を観察する。葉の形は種類によって、それぞれだいぶちがっているので見分けの役に立つ。
- c. 鮮帽、せんがい、胞子のうの形を観察する。
- d. 鮮柄がゴケ本体(配偶体)のどの部分から出ているかを見る。僕が観察したうちでは、本体の先からでてくるもの、途中のわきからでてくるもの、仮根付近からでてくるものの3種類あるようです。
- e. その他、枝のわかれかた、一本の本体から、鮮柄が一本でてくるか、また数本でてくるかをみる。

最後に、採集したゴケをいくつか紹介しておこう。整理ができてないものや、採集しても、保管不十分のためになくなったりしたものがあって、まだ十数種ほどしか同定してもらってない。掲載するにあたり、同定して下さった塚川先生に対して深く感謝いたします。

- | | | |
|------------|--|------------|
| ゼにごけ | <i>Marchantia polymorpha</i> , L. | (ゼにごけ科) |
| むちごけ | <i>Bazzania pompeana</i> , Mitt. | (うるごけ科) |
| やわらうすばごけ | <i>Blasia pusilla</i> , L. | (うるこゼにごけ科) |
| みどりせんぼんごけ | <i>Weisia viridula</i> , Hedw. | (せんぼんごけ科) |
| かざばにわすざごけ | <i>Pogonatum inflexum</i> , Lindb. | (すざごけ科) |
| しろがねまごけ | <i>Bryum argenteum</i> , L. | (かさごけ科) |
| ひのきごけ | <i>Rhizogonium Dozyanum</i> , Lac. | (ひのきごけ科) |
| おおばほうわごけ | <i>Fissidens japonicus</i> , Doz. et Molk. | (ほうわごけ科) |
| おおばちょうちんごけ | <i>Mnium vesicatum</i> , Besch. | (ちょうちんごけ科) |
| こつぼちょうちんごけ | <i>Mnium trichomanes</i> , Mitt. | (ちょうちんごけ科) |
| おおしっぽごけ | <i>Dicranum nipponense</i> , Besch. | (しっぽごけ科) |
- Philonotis* の種類のもの二種

(24)

みつじごけ

Brachythecium moriense, Besch.

(あおきぬごけ科)

つがごけ

Distichophyllum Maibarae, Besch.

(あぶらごけ科)

くしのはごけ

Ctenidium capilifolium, Mitt. (はひごけ科)

みのごけ

Macromitrium incurvum, (Ldb.) Par.

イワカワシジミ について

Deudorix eryx Linne

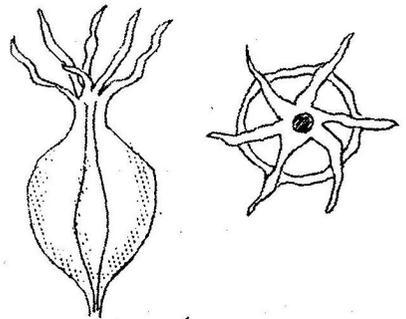
奄美大島にだけ分布し日本に於ける唯一の棲息地である。分布は普通적であるが、数は少ない。平地より山地に多く、山地でも、森林が余り繁らず、低木地帯で、平地と山地の境界面の小川の近くの食草等に多い。

竜郷村幾里、本茶、秋名、円、名瀬市近郊、住用村、大和村今里、守棟村田稔、湯湾の各地で採集されている。中でも、竜郷村幾里と秋名は個体数が多く普通である。

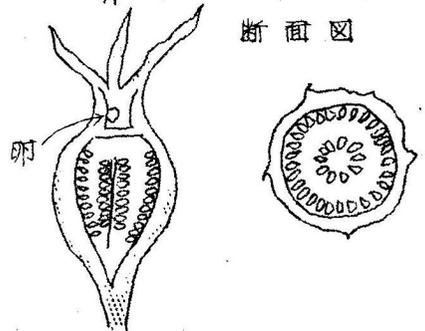
食草はクチナシ果実と花だけである。産卵は果実の先端の凹みや側面、花托、近くの葉や小枝にされ、一番多いのは先端の凹みである。果実1個に普通1個ずつであるが、時には10個も越す場合もある。

幼虫は果実の側面より中に潜入し、果皮だけを残して食べる。側面の潜入孔は脱糞孔となり、体の成長と共に大きく円形にあげられる。糞をする時には肛門を穴の外に向け糞をする。この脱糞孔(潜入孔)の大きさで中の幼虫の大きさを知ることができる。オ/化のできる3月下旬より4月

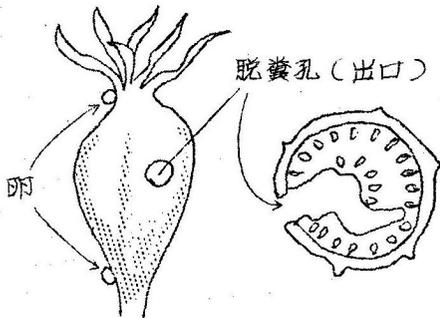
クチナシの実



断面図



にかけては果実がなく、まだ花のためや2化の幼虫は花を食べる。花も側面(花



弁)から入り外部の花弁だけを残してめしべ、おしべ、子房を食べる。このため、この期の幼虫は少し小型である。

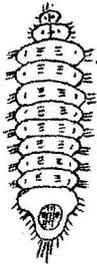
成虫も他の時期とすると小型化している。蛹化は自分の食べた果実の中で行なわれ、外部で蛹化することは野外では観察されていない。飼育の場合は時々びんのふた等で蛹化することがある。しかし、蛹化する割合は少なく、

10匹中 3匹はだめになることが多い(私の観察の結果)。

成虫は朝夕は不活発であるが、日中は非常に敏捷で、とうてい捕えることができない。しかし、オオシマウツギ等の花を吸蜜している時には捕えやすい。

1化の成虫は3月下旬より出現し、4月上旬頃より花に産卵し、5月下旬にはや2化が出現し、以後未熟果に産卵して7月中旬頃、

幼虫



最大 約1cm. 5mm

や3化が発生する。それ以後は世代が乱れて各ステージの幼虫、蛹が発見され、11月中旬まで成虫が羽化し、11月下旬まで活動している。10月中旬以後産卵された幼虫は、そのまま果実の中で羽化し、3月上旬 食せず、そのまま蛹化して3月下旬から4月上旬に羽化してや1化となる。

成長期間は時期によって大部差がある。蛹期だけを記すと3月は23日から24日間、5月は9～11日間、10月には8日～9日、11月は10～12日である。卵期は余り変わらないが、幼虫期間も時期によって大部違って来る。年々5～6回発生すると思われる。

竜郷村竜北中学校 教諭 久保邦照先生の著作を参考し、去年と今年(今家で10匹程度飼育している)の私の観察をもつて、記しました。

血液型判定

二年 森田房子
福原孝代

文化祭の時に血液判定を受けました。

血液型判定は一年の時にしてみたのですが、その時はただやりっぱなしということでしたので、今年は人質などを調べてみることにしました。

「血液型無料判定」のポスターを入口にかかげておいたためか、あまりにも人氣をよびすぎて、てんやわんやの大騒ぎ。A型の人がつづいて、8人もきて、血清がどうかなっているのではないかと心配したり、ある生徒の血液型を調べるのに耳を二回ほどつついたけれどもなかなか血液がとれなかったのもう一度強くつついたところがあまりにも血がとすぎて困ってしまった。教用のヨードチンキをちょっと拝借して、消毒し、脱脂綿をあてて、かえってもらった。そのときなどはひや汗がでて、恐かった。何度もして慣れてくるにつれて、なんともなくなつた。いま考えると、その人には気の毒ではあるが、苦笑談の一つである。

文化祭は11月17～18日の両日でしたが、その2日間血液型判定用の血清を17本も使うというほど大好評であった。あまりにも人数が多すぎて、「小学生はあとまわし」などといって小学生にうらまれたり……。

とにかく忙がしい文化祭であった。

では次に判定時の用具、方法などを述べてみよう。

○用具

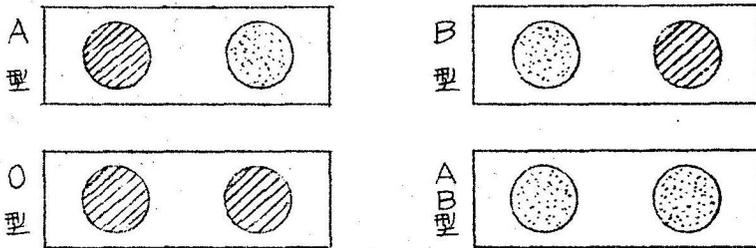
A型血清、B型血清、マッチ軸木、カミソリ、スライドグラス、シャーレ、脱脂綿、フリーズ液、アルコール、(他に失敗した時のためにマーキュロ液、ヨードチンキ、ガーゼ、バンソーゴ)

○方法

安全カミソリの刃をななめに鋭利な形になるように折ったものをアルコールで消毒する。そしてシャーレにもアルコールを含ませた脱脂綿を入れておき使ったカミソリはこれをふいて、次にまた使うようにする。

まぜカミソリで耳たぶをかるくつつき、手でもみながら血をだし軸木とする。次にA型血清、B型血清を一滴ずつたらしたスライドグラスにその血をつけてかるくまわす。この場合、A型血清につけた血をB型血清にもつけるのではなく、また新しい軸木でとり別々につけてまぜあわす。

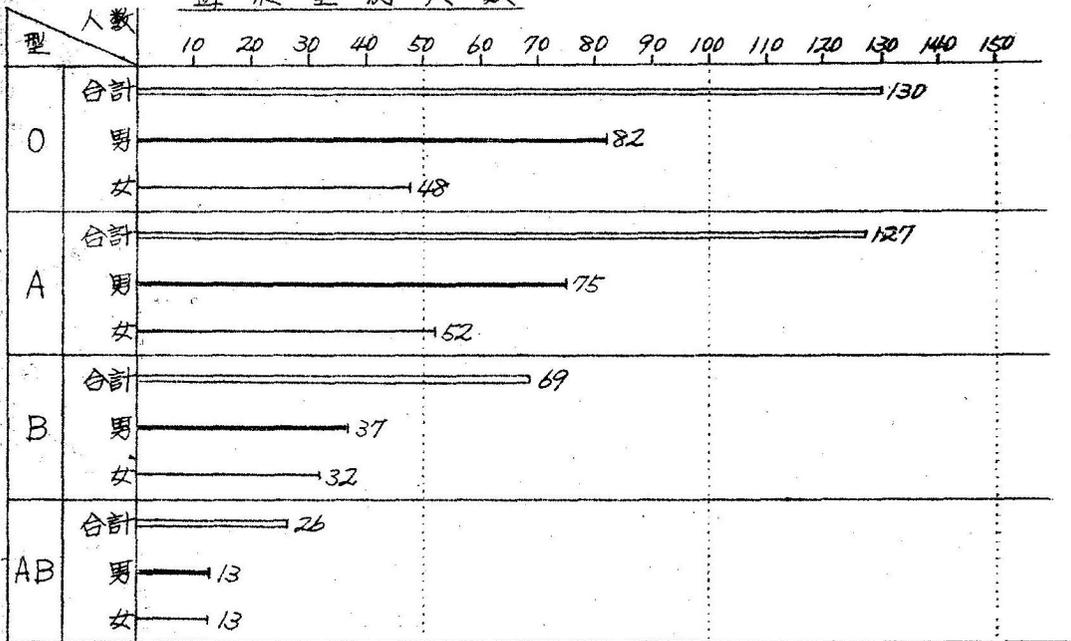
判定法は、次のとおり。



注：スライドグラスの左側A型血清、右側B型血清

 凝集しない
 凝集反応

血液型別人数



総人員 352名

男 207名

女 145名

A型 36%

O型 37%

B型 19.5%

AB型 7.5%

血液型係数 1.61

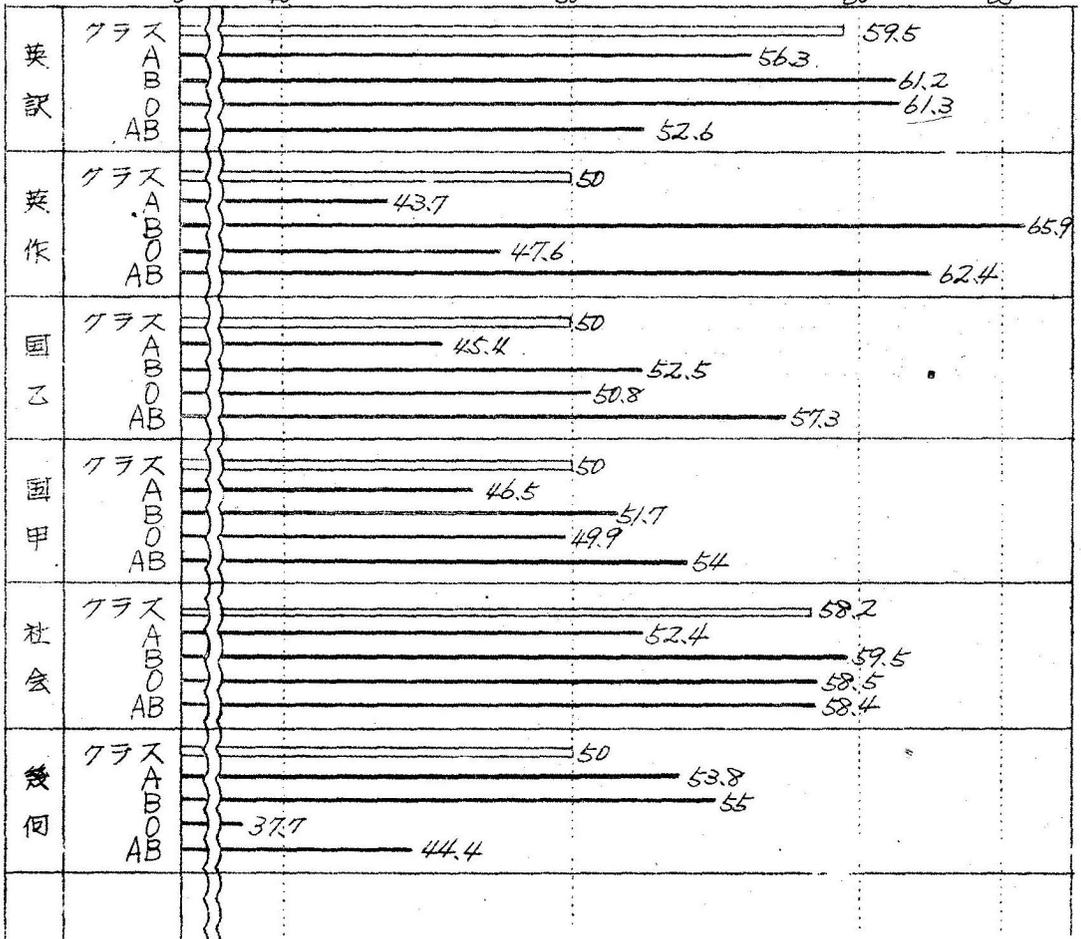
これは日本人の血液型係数1.6にほぼ等しいことが言える。(各人種別の血液型民族係数と血液型係数の対比方は「血液型と等力」を見よ)

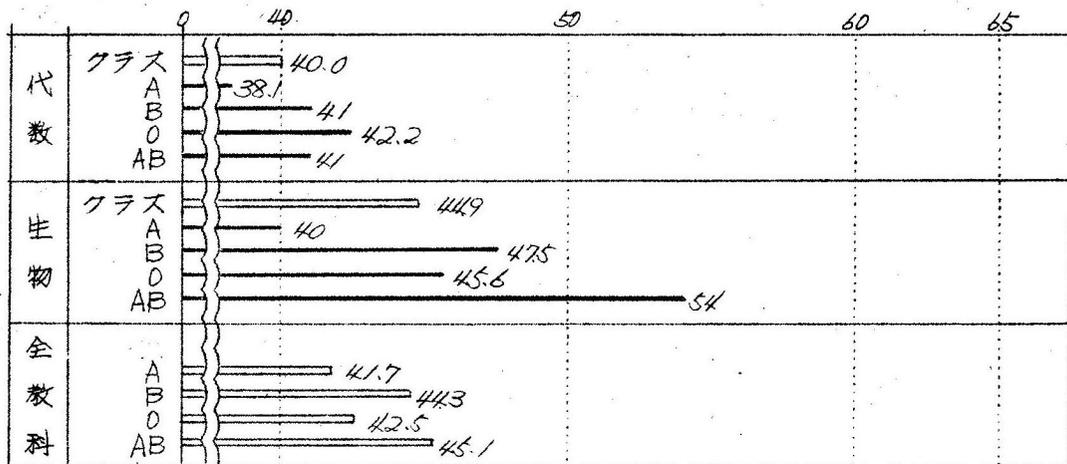
血液型と学力

一年 平瀬吉磨

二つのグラフはあるクラスの二学期の中間テスト、中間テストと期末テストの平均、前者が(1)のグラフ、後者が(2)のグラフです。中間テスト、中間テストと期末テストとの平均点を血液型(A, B, O, AB)にわけ、各血液型、誰は何型と氏名はわかっていますのでこれとテストの点数を照らし合らし各人のテストの点数を加えて、その血液型の人数で割ったものです。

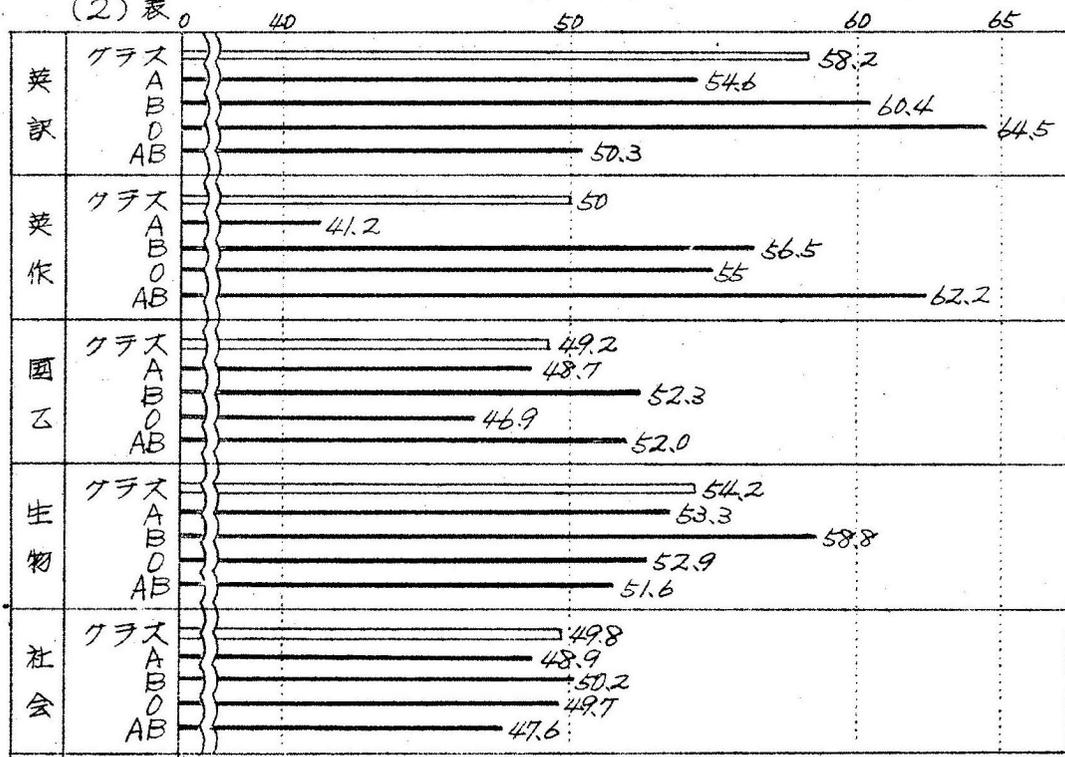
(1) 表 0 40 50 60 65



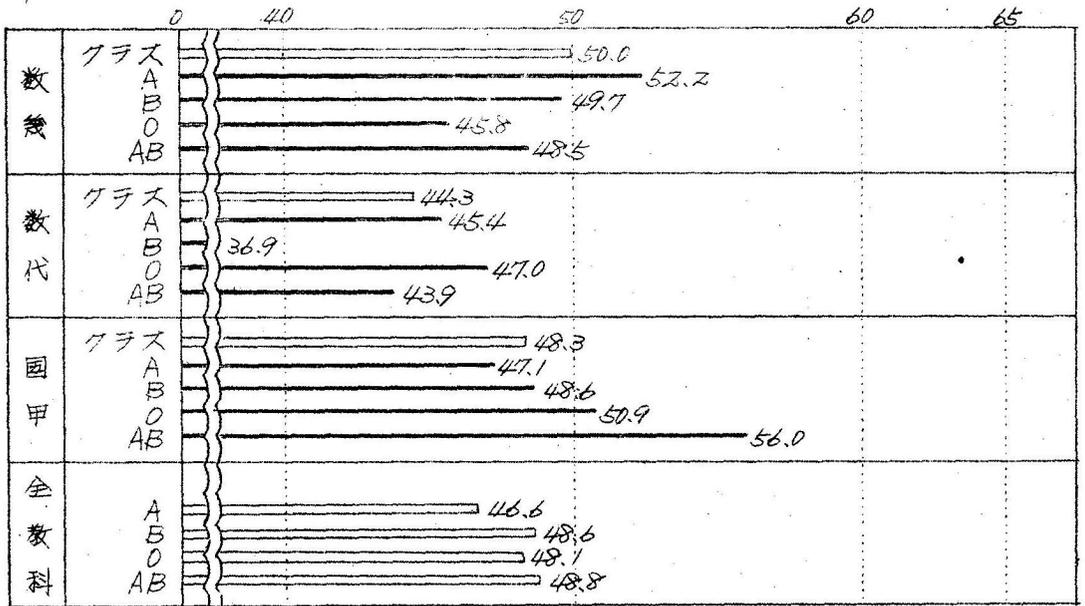


(1) のグラフを見ますと AB 型は英訳、英作、国語乙、国語甲のように長期間こつこつと勉強しなければ実力のつかない教科においては他の血液型の平均点より優れています。又、社会、数学幾何、代数、生物のように、もちろん毎日こつこつ勉強しなければ実力はつきませんが、一時的な勉強も敏感に影響する学科においては生物を除いて一般に低いようです。

(2) 表



(30)



上のような事からをもっと詳しく知りたいと思い中間テストと期末テストとを平均してグラフにしたら(2)のようなグラフになった。このグラフを見ますと(1)のグラフにおいて言えた事がまったく「そうだ」とは断言できないようなグラフになっていますが次のような事が(1)と(2)のグラフから言えると思います。

1. 全教科においては最もAB型が優れており、A型が最も劣っています。
 2. 英訳、英作、国乙、社会はほぼ同じ結果がでている。
 3. A型、B型では(1)(2)の差が大きいですがAB型はあまり変化がない。
- しかし上のことは資料不足のためにはっきり断言はできません。

この二つのグラフからは、はっきりわかりませんが一つ興味を引くものがあります。これはこのクラスにAB型は3名しかおりませんが、このクラスで一番成績が良い人、それに対して一番成績が悪い人が同じくAB型であります。又、O型は各人の差が他の型より小さいようです。

次に対象となった人員やその他を示しておきます。

血液型検査人員	53名	A型	18名	37.5%
		B型	12名	25.0%
		O型	15名	31.3%
		AB型	3名	6.3%
		血液型不明者	5名	

血液型係数は1.4、日本人が1.6ですので少し低いようです。この1.4と言う係数は中間型(アラビア、トルコ、ロシア、スペイン)1.3 ~ 1.5に近いようです。

参考までに血液型係数の求め方と各人種の血液型係数を示しておきます。

$$\text{求め方} \quad \frac{A \text{型}\% + AB \text{型}\%}{B \text{型}\% + AB \text{型}\%}$$

各人種の血液型係数

欧州型	2.0 ~ 4.5
中間型(アラビア、トルコ、ロシア、スペイン)	1.3 ~ 1.5
アフリカアジア型	0.3 ~ 1.4
太平洋アメリカ型(アメリカインディアン、オーストラリア土人、フィリピン人)	0.8 ~ 1.0
満州型(満州、朝鮮)	0.6 ~ 1.2
湖南型(南支、日本)	1.6

又、このような争をやった目的には、AB型は頭が良いとか、とにかく血液型と学力についていろいろ聞きましたので、まあこのような争に興味を持ったからです。もちろん一クラスでは誤差が出て来ると思いますが、全クラスを調べるには(学校で血液型判定はやってありますので)各個人にそれぞれ何型であるか尋ねなければなりませんので一クラスだけやる事にしました。

対象人員がまだ多くなるにつれて、もっとはっきりした争が言えるでしょう。皆さんも、これを読んで興味をお持ちになったら血液型と学力を一つのテーマとして調査なさったらいかがでしょうか。

個人点評

前田 等 (2年)

なかなかユーモアがあり、何でもマスターする能力がある。生物方面にはもったいないほど、芸術方面にひいでているがその反面、お天気屋なのが気になる。しかし、まじめで、やさしい、美男子とはいえないが好青年である。

(ある女生徒の点評)

ミドリムシ Euglena

二年 坂崎常隆

動物を大きく分類していきますと、先ず第一番目に原生動物を始めとし、海綿動物……脊椎動物にいたるまで、ムシに分類する事ができる。そこで私は原生動物のべん毛虫類である ミドリムシ、マゴウチュウ、トリパノソーマのうち最も原始的なミドリムシについてだけ少しばかり述べたいと思います。

このミドリムシはべん毛虫類として動物側に入れて考ふるが、その理由について申しますと、ミドリムシは、両端がだ円形の細い単細胞で、細胞膜がなく、原形質だけを持っていて、緑色の葉緑素をもっているが、黄色、かっ色、無色の色素をも持っている。そして又炭酸同化作用を行い、一本のべん毛をもち、このべん毛で水をむち打つようにして進むので、べん毛運動 (Flagellated movement) とよんでいる。このようにべん毛という運動器官をもっていて、さらにべん毛の付根の所に食道と、赤みがかった眼点 (ただ明暗だけを見わける) と称する光を感じる器官をもっている。

以上のことから動物の分野に入るのではないかとと思われるのですが、又、葉緑素などを持っている事などから見ると植物とも言い得るので、動物と植物の境界と考えられるのであります。ところでこのような動物とも考えられ植物とも考えられる不思議なミドリムシの生息している場所とは申しますと、緑色をした水溜りや、池の水、その他花びんの水 (入れてから1週間 ~ 10日ほど経たもの) の中によく住んでいます。

坂崎常隆 (二年)

前田等君とゴンビをくみ早や二年、「ヒトシ」とよべば「ツネ」とよぶ仲のよさ。貴重面であって性質温厚、たのもしい男性である。彼には一つ特技? があり、それは実に達筆なことである。文化祭時の生物部の表や書きものは彼の手による。我々部員は、彼の字は「国定級」のものであると信じている。

このミドリムシを私たち生物部では、ワラを5cm程度に刻んで、それをビーカーに入れ、又 ミドリムシも一諸に入れて数日おくと発生します。この液をスポイトでスライドガラスに一滴とり顕微鏡を観察してみると、すごいスピードで眼前を通りすぎていく。このミドリムシの進み方は、べん毛のある方を先にして体の軸を中心とし、グルグル回転しながら進むのです。この運動の激しいミドリムシを固定するのは、ちょっとばかり難しいです。固定液として、アラビア溶液か、流動パラフィンを使用します。この固定溶液を使用しますと、運動がにぶくなり、べん毛や進み方がよく観察できます。

次に培養の方法を記します。

わらを3cm位の長さに切り、水の入ったビーカーに入れて、90~100°C程度の温度で水がねばりけのある、黄橙色に変わるまで約30分間、充分に熟する。わらを取り出した液をろ紙で漉します。その液をごみやほこりが入らない様に一昼夜安置します。そして小麦を煮つめて前の液に入れます。こうして作った培養液の中にミドリムシを2、3匹入れて日陰に安置しておきます。以上がだいたいの方法ですが、ゾウリムシも同様にして培養しますので、ミドリムシを入れる時によほど注意しないと液がゾウリムシで一杯になりミドリムシを取り出すのがむずかしくなります。

中山 建男 (2年)

「カマキリ」というあだ名があるのはやせているせいかな？ それとも生物方面にひいでているせいかな？ そのいわれは今だかつて解明されていない。実に研究熱心で一見風来坊の感じがするがその通り、海でも山にでも観察にでかけて行く。

喜入 喜久男 (2年)

生物部オーの変人、無口であるがいつもにやにやした(失礼)笑いをうかべていて、気が向けば、オットンガエルの声なき声をもとめて、夜でも昼でも、照っても降っても採集にでかけて行く。

今後の彼の变人ぶりに期待する。



奄美の花

アマミセイシカとその近縁種

顧問 大野隼夫

3月下旬、大島電力KK・住用発電所に行くと途中から山際に点在するアマミセイシカの純白(よく見ると淡紅色であるが)の花が鮮やかな景観をかもし出す。Rhododendron(ツツジ属)の双位着田原輝夫氏(農林省園芸試験場久留米支場)によれば、この植物はすでに江戸時代に江戸に移植され観賞に供された記録があるとの事である。

この原種は、*Rhododendron leiopodum* Hayata セイシカ(ヤエヤマセイシカ)として沖縄の石垣、西表の山地に分布しているが、住用のアマミセイシカはその変種(Var. *amamiene* Ohwi)となっており、分布は極限されている。守検村の石良、大和村の福元、住用村、松田山にもあると言われているが他の地域は未踏査のため明らかでない。いずれにしてもその分布は上記発電所付近、他にあるとしても一部に限られているのではないかと思われる。従ってこの種は奄美の代表的植物として貴重な存在である。又、観賞植物、或は園芸品種として将来相当な価値があると思われること等からこの植物に対する多少の知見と、この同属の2、3について簡単に記す事にする。

Rhododendron leiopodum Hayata var. *amamiene* Ohwi

アマミセイシカ

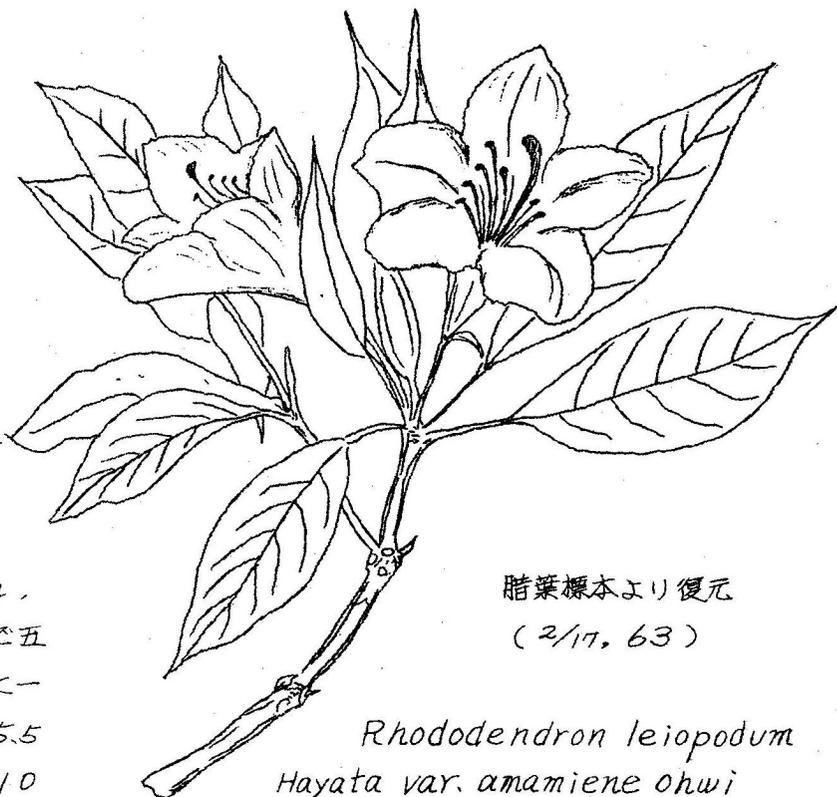
灌木又は小喬木で全株無毛種、葉は数枚〜10枚内外枝端にぞう生し、長さ

福地 瑞也 (3年)

解剖学の权威者? とも言えるほど解剖通で今年度で野犬を6匹ほど解剖しているがまだあき足りないらしい。

大声で話をしないと相手が聞いてくれないと思っているから、彼の話を聞くときは、耳に栓をしておいた方がよい。これは他の生物部員の一一致した意見である。

約11cm (葉柄1.5cm, 葉身9.5cm) 巾約2cm, 長楕円形をなし先端着るしく尖る。花は頂端に1~数花を繖状につけ花梗約2.5cm, 花冠はろう斗状で長さ約7cm, 花径約6cmで五裂する。中心に一個の雌蕊(約5.5cm)と周辺に10個の雄蕊(約4cmばかりで長短あり



腊葉標本より復元

(2/17, 63)

Rhododendron leiopodum
Hayata var. *amamiense ohwi*
アマミセイシカ 2/3

があり共に発芽する。3月中旬より咲き始め花色は淡紅色で下旬頃には一斉に咲き揃い極めて美観を呈する。

備考 岩礫地に多く着生する關係で掘る時根をいためやすく移植は困難である。但し適當な幼樹を見つげ土を着けたままであれば移植も容易である。特にこの植物は森林樹下に多い点から見ると移植場所は強風と向陽地を避けた方が良く思ふ。学校に数本移植したが強風と根の破傷の結果殆んど枯死し

栗園重弘 (3年)

生物部では小柄な体格で、いつもチョコチョコ歩いている。部室ではたいがい一人でコツコツと研究(?)している。クリ、クリと呼びすてにされても、勝手にここにしている。どっか足りないのかもしれない(身長の方は、もちろん足りないが)

(36)

てしまって、一本だけ辛うじて生き残っているのを充分保護したい。住用付
並の方言……シルザクラ。

Rhododendron scabrum G. Don.

ケラマツツジ

本群島における最も普通のツツジで全島到るところの山地に自生する。小灌木
で枝は細く全株扁平な褐毛を生ずる。(但し古い莖は退化)。葉は狭楕円形又
は狭卵円形で硬く両端鋭形、葉柄5~10cm, 葉身3.5~10cm, 巾1.5~
3cm, 花は1~4個を繖形につけ1~2cmの褐毛がある小梗を有す。花冠
はろう斗状, 径6~8cm, 赤色(朱色)を呈し5裂する。時に庭園に栽植され
観賞に供される。琉球及び奄美に分布する。方言……ツツジ(北大島)。
花期4~5月。

Rhododendron Tashiroi Maxim

サクラツツジ

本群島全般の山地に自生する灌木又は小喬木で樹肌は灰白色を呈す。葉は普通
3枚宛, 輪生状につき, ほぼ楕円形で幼時は褐毛を生ずるがすぐ無毛となる。表
面は深緑で光沢があり, 裏面は淡色, 花は頂端に2~3個宛, 繖状につき小梗
は1~2cm, 萼は小形である。花冠はろう斗状, 花色は淡紅をおびた白色, 花
径3.5~4cm, 無毛, おしべ10本, 花柱は稍々とび出して, 長さは約2.5cm
花期12~3月。

備考 本群島では時に喬木となり樹肌に不規則な縦じわ(凸凹)を生じ剥皮
すれば光沢をおび, 美麗なる華と枝質陰鞞なるをもって床柱等として建築材
にも用いられ, 有用樹である。移植は稍々困難であるが根廻し等をする可
能である。方言……ヤマザクラ(本島)。

政 定 好 (3年)

目がギョロリとして, どうかカエルに似ているせいか, よくオットンガエルや
イシカワガエルを採集してくる。シュバイツワー博士を尊敬し, ラムバレネ病陰
のことを話したり, またあの古世代の島とも言うべきマダガスカル島のことを話
してはよく舌をかんんでいる。研究熱心では人後におちない。

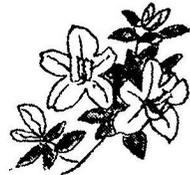
Rhododendron simsii Planch.

タイワンヤマツツジ (トウサツキ)

大和村宮右岬及び徳之島海浜(但し徳之島未踏査)に自生する優小灌木で一見前記ケヤマツツジに稍々似ているが、葉が極めて小さく短楕円形である。(葉柄約6mm, 葉身約2.5~3cm, 巾約1.5cm)甚だしく優小性である事。花冠が小なる事(約1.8~2.5cm)。花色が淡紫をおびた紅色である事。花期が3月中旬~下旬なる事等が著しい相異点である。

備考 本島に於ける分布は極限され、貴重な存在である。又宮右岬は一面の優性リュウキウチク?の草原であり、この中にオキナワハイネズ、及びこのタイワンヤマツツジが点在し、開花の頃(3月中、下旬)は緑の中に点在する紅のツツジの並景に配して磯に碎ける波濤、雄大な海洋の遠景が展開し眺望絶佳の地である。

以上本群島に自生する *Rhododendron* (ツツジ属)について略記してみたが、特にアマミセイシカ、タイワンヤマツツジ等はこれを充分に保護し、増殖に努力すれば奄美の観光資源として脚光を浴びる事は必至である。



森 田 房 子

田 中 規 子

この二人は中学時代からのコンビだが、口が悪い事、いたづらをする事、成績の低空飛行というところが二人の共通点である。

仕事には熱心なのだが、たまたま遊ぶ事に魅力を感じ、仕事にありつけない。

(38)

荒垣 美保子 泉 雅子 福原 孝代
川崎 三重子 川元 栄子

この四グループである。しゃべる事と食べる事をのぞいては何も取り得がない。彼女達が集まるとまるで蜂の巣をつついた様ににぎやかになる。そしてすぐ口に出すのが採集遠足。採集となるとやぶでもどこでも元気に入って行く。男子部員もおどろくばかりだ。

本 郷 清 美

動物は動くのでこわいが植物は採集するのが好きだ。生物部に入ってから血液判定に興味が多そう。部活動は良かったとは言えないと本人は言っているが.....。

房 博子 伊東 ムツ代

はじめ植物の各性質を知るために入部したのですが、なにがなしにもっぱら部会に出席してはおしゃべり、採集遠足に花を咲かせるといった調子のコンビです。

部 記

昭和37年度

- 3月 奄美の原始林八津野へ採集旅行(2名)
- 4月 ポスターを掲げ部の紹介。今年度部員46名
29日 新入部生歓迎をかねた一回採集会 名積——崎原——小湊
- 6月 野犬の解剖、並びに心臓灌流実験失敗
- 7月 住用村東仲間への採集会(11名)
- 8月 野犬の人工心臓灌流実験(2匹)失敗
- 10月 きいろすずめばちの巣を夜間採集に行く(浦上へ)失敗。その夜イシカワガエルを捕かく。翌日、巣をとる。

- 11月 3日、住用村役勝からアマミセイシカをとってきて植える。(2名)
 高石崎からダイワンヤマツツジをほりおこし、花壇に植える(8名)。
 4日、赤崎へオットンガエル採集
 10日、本茶峠へオットンガエルの夜間採集、獲物なし
 17～18日 文化祭 園芸部と共同で野草、貝殻、昆虫展、ニワトリ、小イヌ、ネズミなどの解剖、実験、顕微鏡観察、模型、脊椎動物標本展示、血液型判定大好評
 文化祭反省(ニワトリのスープ、カレーライス)
- 12月 安勝山へ採集会
- 2月 ORIENS原稿X四
 ORIENS発行

昭和37年度

生物部員名簿

顧問 大野 隼夫 先生
 南 健一郎 先生

<1年>

1組	津田	美和子
"	和泉	芳子
2組	西	隆夫
3組	平瀬	吉鷹
"	森田	盛政

<2年>

1組	森田	房子
"	田中	規子
"	里	文子
"	本郷	清美
3組	伊東	ムツ代

(40)

3 組	房	博 子
4 組	荒 垣	美保子
〃	泉	雅 子
〃	川 崎	三重子
〃	川 元	栄 子
〃	福 原	孝 代
〃	前 田	寿
〃	茨 崎	常 隆
〃	中 山	建 男
5 組	喜 入	喜久男
<3 年>		
3 組	福 地	瑞 也
4 組	政	定 好
	栗 園	重 弘

編 集 後 記

- ◇ 今年度はあまり部活動が活発でなかった。またORIENTSも12月中では発行しようと思っていましたが、ずるずると年を越して2月にまでなってしまいました。まことに残念です。
- ◇ 毎年、発行が1ヶ月ずつずれて遅れてゆくようでちょっと淋しい気がします。
- ◇ しかしそれでもどうにか今までの活動記録をまとめてORIENTS第4号という冊子にまとめることができて、生物部員一同心から喜んでいきます。
- ◇ 原稿をいただきました大野先生、表紙図の南先生に感謝します。
- ◇ 春の日刊のつづくきょうこのごろ、さすがに極美大島だなと感じさせられます。では今後の生物部とORIENTSの発展を祈って、ペンを置くことにしましょう。

編集責任者 栗園重弘

ORIENS 第4号

印刷 昭和38年3月15日
発行 昭和38年3月20日
編集発行 鹿児島県立大島高等学校
生物部
(名瀬市南安野町5班)

印刷所 名瀬市山下町4班
文芸プリント社
TEL 690